

Epiphanies その瞬間

No.9

『科学』の付録に 心ときめかせた頃

何年か前に小学校の卒業文集に「研究者と
なってイネの品種改良をしたい」と書いてい
たのを知り、私自身びっくりしました。自然に恵まれた
環境に育ち、様々な動植物に接し、夏休みの自由
研究では押し花をつくったこともありました。小学生
向けの雑誌『科学』に心ときめかせたのもこの時
期。付録の実験器具を見ただけでワクワクしたもの
で、研究者という仕事にいつしか憧れを抱くようにな
ったのかもしれない。

それでも大学時代にはまだ自分の進むべき明確
な道は見えていませんでした。大学院では東京工
業大学の畑辻明先生の研究室に入り、同時に先
生が共に研究をしていた国立遺伝学研究所の三
浦謹一郎先生のところにも通いました。こうした大学
院での5年間を通して、仮説を実験で検証する面
白さを実感でき、自分が研究者に向いていることを
確かめることができたようにも思います。植物の遺伝



植物分子生理学研究室

篠崎 和子 教授
Kazuko Yamaguchi-Shinozaki

子の研究に初めて携わったのはその後、名古屋大
学の杉浦昌弘先生の研究室に入ってから。このと
き、研究をさらに発展させるために植物分子生物
学の道に進むことを決心しました。

1987年にはニューヨークのロックフェラー大学へ
の留学を果たしました。私が入ったのはシンガポ
ール出身の生物学者ナム・ハイ・チュア先生の研究
室。チュア先生からは植物が花をかたちづくる仕組
みの研究か、植物の体の中で作られるアブシシン
酸の仕組みの研究か、どちらかを選ぶように言わ
れ、私は迷うことなく「アブシシン酸の研究をしたい」
と答えました。すでにアブシシン酸は植物が環境ス
トレスに耐えるときの反応に関わると考えられていま
したが、その働きや仕組みは謎のまま。ならば、これを解
き明かし、その成果を活かして環境ストレスに強い作
物を作れば農業にも役立つはずだと考えたので
す。以来、研究を続け、様々な謎を解明してきました
が、挫折しそうなことは幾度もあります。それでも
あきらめなかったのはたゆまぬ研究の末に真実にた
どりつく喜びや、その成果が人の暮らしに役立つ農
学ならではの喜びがあったからです。そして、未知の
領域への好奇心。『科学』の付録を手にしてワクワク
した子供の頃からそれは変わっていないように思
います。



大学院時代に分子生物学を学んだ
国立遺伝学研究所分子遺伝部のメンバー
後列右から2人目が三浦謹一郎先生、
前列左から3人目が杉浦昌弘先生、6人目が篠崎和子